

国際青年

2014年(平成26年)11月1日発行

第39号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International Youth Volunteers

親子2代の現役隊員も

★平成26(2014)年度壮行会

■2次隊壮行会

平成26(2014)年9月22日(月)

さいたま商工会議所会館1階ホール

埼玉国際青年を育てる会

青年海外協力隊埼玉県OB会 共催

土・日と秋分の日に挟まれた月曜の壮行会で、出席者数が気掛かりでしたが、その分、1人1人の挨拶の持ち時間に余裕ができ、内容のある壮行会となりました。

当会の星野会長による主催者挨拶の後は来賓の言葉。JICA国際センター地域連絡課の佐藤課長は、ご自身の海外ボランティア経験を踏まえて「真っ白い画用紙に絵を描くつもりで行けばよい」とアドバイス、そして埼玉県県民生活部国際課の秋山主幹からは「次に続く人たちの目標となるような活動を」との要望が寄せられました。

その後、派遣隊員13名(1名が欠席)が挨拶しました。みんなが活動予定をていねいに説明していたのが印象的でした。順番が最後になったシニア海外ボランティアの男性は、何と1年前にお嬢さんが同じ会場の壮行会に出席したということで、親子2代の現役隊員になります。



この後、当会の瀬島会長の音頭で乾杯(アルコール抜き)し、歓談の時間となりました。隊員同士、隊員と

OBとのなごやかな歓談が一段落したところで、OB会メンバーの挨拶がありました。榎本会長の



マラリアに2度かかった話など、具体的で親身になった経験談が続きました。隊員代表挨拶の中でも、「頼りになるOBたちの経験から学びたい」という言葉が入っていました。ただ、西アフリカに行く隊員のお母さんからの「無事に帰ってきてほしい」の一言は、エボラ出血熱が猛威を奮っている時だけに実感がこもっていました。

—派遣先と職種—

- ・ベナン……コミュニティ開発
- ・マラウイ……コミュニティ開発
- ・ガーナ……理科教育 服飾
- ・キルギス……手芸
- ・バングラデシュ……マーケティング
- ・ニカラグア……青少年活動
- ・フィリピン……環境教育 食品加工
- ・トンガ……音楽

(シニア海外ボランティア)

- ・ボリビア……助産師
- ・ベトナム……建築
- ・インドネシア……日本語教育
- ・フィジー……空港

● 39号目次	・平成26(2014)年度壮行会	1・2
	・平成26(2014)年度定期総会	2
	・帰国隊員報告会	3
	・文化人類学者が書いた当会会長の評伝	3

・現地レポート	4~15
・【情報提供】JICAの危機管理について	15・16
・新会員のご紹介	16
・お知らせ	16

■ 1次隊壮行会

平成 26(2014)年 6月 23日(月)
さいたま商工会議所会館 1階ホール
埼玉国際青年を育てる会
青年海外協力隊埼玉県 OB会 共催



派遣される埼玉県出身の青年海外協力隊 20名とシニア海外ボランティア 3名は、県より「埼玉親善大使」を委嘱されました。委嘱式では塩川修副知事から「苦勞も多いと思うが健康第一。埼玉、日本の代表として頑張ってもらいたい」と激励されました。隊員たちは任期中、それぞれの分野で世界各国との友好の懸け橋になるわけです。

壮行会でも、主催者たる当会の星野和央会長の開会の辞に続いて、塩川副知事が熱く語りかけました。ご自身の 40代での初の海外旅行での刺激、収穫を紹介し、「帰国したら、経験を埼玉で役立ててもらいたい。みんなにも伝えてほしい」と、出前講座参加にも言及していました。

また、JICA 東京国際センターの洲崎毅次次長は「派遣隊員たちを支えている人たちのことを忘れてはならない」と、責任の重さを説きました。

続いて派遣隊員たちの自己紹介になり、トーンは違うものの、抱負とともに責任感のにじむ言葉が並びました。具体的な目的を語る隊員もいました。



軽食をつまんでの歓談の時間をはさんで、OB 隊員たちの激励の言葉、派遣隊員の家族の一言と、会は進行しました。現地を経験した OB の話と、見知らぬ国に子供を送る家族の不安まじりの感情吐露は対称的でした。

最後は派遣隊員代表の「みんな、元気で行って来い！」とぶっきらぼうながらも力強い一声で明るく幕となりました。

——派遣先・職種——

- ・ボリビア……小学校教育 理学療法士 造園
- ・ナミビア……PC インストラクター
- ・ネパール……コミュニティ開発
- ・サモア……PC インストラクター
- ・ニカラグア……青少年活動
- ・ケニア……水質検査 コミュニティ開発
- ・ブルキナファソ……小学校教育 青少年活動
- ・パラグアイ……体操競技
- ・パプアニューギニア……PC インストラクター
- ・エチオピア……幼児教育 小学校教育
- ・タイ……理学療法士
- ・ペルー……柔道
- ・エクアドル……作業療法士
- ・カンボジア……助産師
- ・南アフリカ共和国……工作機械
(シニア海外ボランティア)
- ・ケニア……電子工学
- ・ネパール……食品衛生
- ・ニカラグア……障害児・者支援

(山田 洋)

★平成 26(2014)年度定期総会

平成 26(2014)年 5月 31日(土)

国際交流基金 日本語国際センター

5月だというのに真夏を思わせるような暑さの中、埼玉国際青年を育てる会定期総会が開催されました。井上泰一事務局長の司会で開会し、星野和央会長があいさつしました。あいさつの中で、ネクタイやスーツを脱ぎ捨てたいような暑さの中、ご参加いただいた来賓や会員の方々にお礼を述べ、来年 20周年を迎える本会の歩みについて話しました。そして、1年に 4回の壮行会や JICA 帰国者の出前講座などを通して、隊員の活動に対する理解を広めていくことが、地味だが大事な取り組みであると述べました。その後、総会議事で議案第 1号から第 4号までが無事承認され、今年度の活動が始まりました。

来賓として、埼玉県国際課・グローバル人材育成担当の小山直樹氏、一般社団法人協力隊を育てる会事務局長の奥永眞智子氏が、協力隊の事業の素晴らしさや意義について述べられました。

総会後の懇親会は、小島章裕常任理事の司会で和やかに行われました。帰国報告会をした隊員や来賓者を囲んで、貴重なお話を聞くことができ、また日頃会う機会の少ない会員たちとも話すことができ、楽しいひと時を過ごすことができました。
(中島美都里)

★帰国隊員報告会

平成 26 (2014) 年 5 月 31 日 (土)
国際交流基金 日本語国際センター



総会后、2名の隊員から帰国報告がある予定でしたが、1名が欠席となったので、急遽本会の常任理事であり、また JICA の埼玉県会長でもある榎本敬さんがタンザニアでの活動について報告しました。氏は 18 年前の平成 6 年、タンザニアの内陸部ラングイラ村へ赴任されたそうです。18 年前のことで現在のように手軽にデジカメなどありません。8 ミリビデオを使って農作業の様子や日常生活や自然の風景などを紹介しました。全て手作業で農作業や薪運びなどを行っていました。干し泥で家を建てる作業も人々が協力して手で行っていました。また、食事は、ウガリとよばれるとうもろこしを茹でてつくったものが主食です。みんなで食卓を囲む食事風景は楽しそうでした。バケツ 1 杯の入浴風景やさえぎるものが全くない広い空など、豊かな自然を感じました。18 年経っても当時と全く変わっていないだろうという言葉が印象的で、彼の地の現在に興味を惹かれました。

続いて昨年 8 月に帰国した 23 年度 1 次隊の新江梨佳さんがマラウィでの活動を報告しました。理科実験の経験から理数科教師として JICA に参加したいきさつから、教育への思いまでを、自身の体験を交えながら話しました。チェワ語で「ボッ！」と親指を立ててあいさつをすることから始まり、マラウィの国や学校で理科の教師をしている様子などを紹介しました。2 年間で見てきたものは、貧しさや悲惨さ、苦しみではなく、キラキラしていた人々、皆が元気で意欲に満ち溢れていて、そのエネルギーや笑顔に圧倒されそうだったということです。

隊員経験者たちは自分の目で見、感じ、自分の可能性を強く確信しているようでした。貴重な経験を通して、今後さらに活躍して行かれることを期待したいと思います。

(中島美都里)

文化人類学者が書いた当会会長の評伝

「埼玉国際青年を育てる会」の星野和央会長は、県内の地域出版社「さきたま出版会」の会長でもあります。彼の多岐にわたる活動を地域という視点でとらえた本が同社より刊行されました。それは『地域社会を創る ある出版人の挑戦』で、著者は埼玉大学名誉教授の文化人類学者、阿部年晴氏。星野氏との初対面の時に、日本とアフリカの村落社会について話し合ったことが縁で、星野氏の活動に興味を持ち、7 年前から出版の準備を進めてきたそうです。



星野氏は三室（現・さいたま市緑区）の出身で大学卒業後、東京の出版社に勤め、教養書の編集を担当、役員にまでなりましたが、40 歳で退社、地元埼玉に根ざした出版社を立ち上げたのです。地域にかかわるきっかけは小学校の PTA 活動だったそうです。それから 40 年、郷土本を中心に 900 点以上を刊行してきました。

地域のさまざまな団体や活動にかかわっている星野氏ですが、「埼玉国際青年を育てる会」との関係も、地域のグローバル人材養成ということからだったといえます。

8 月 1 日には浦和ロイヤルパインズホテルで刊行を祝う会が開かれました。平日の 11 時というのに地域の人々を中心に各界から多数の出席者が集いました。朝日新聞の名物記者だった轡田隆史氏の司会でトークセッションという形で始まり、祝宴では埼玉県の上田清司知事や毎日新聞の朝比奈豊社長から祝辞を受けました。

会員の皆さんには是非お奨めしたいこの本、定価は 2000 円（税別）。書店になかったら、問い合わせは、さきたま出版会（☎ 048-822-1223）まで。
(山田 洋)

入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。是非お知り合いをご紹介ください。申込書等は、事務局に用意してあります。気楽にお問い合わせください。

【年会費】

- ①個人会員：一口 3,000 円
- ②団体会員：一口 10,000 円
- ③法人会員：一口 20,000 円
- ④ご寄付；大歓迎です

現地レポート

■清水聖希（さいたま市）
25年度4次隊 タンザニア JV
PCインストラクター

ザンジバルのサッカー事情

私の任地は、タンザニアの主要都市ダルエスサラームより北方に約75km、インド洋に浮かぶ島ザンジバル島である。昔はアラブとの貿易の拠点となっていたことから、タンザニア本土とは違う文化を持っている。初めて島に足を踏み入れた時、ストーンタウンのアラブ風な街並みに「別の国に来たみたい！」と思うほどだった。

そんな島だが、島のみんなが好きなスポーツはサッカーである。子供達は、荒地であろうと路地裏であろうとボールさえあればどこでもサッカーをする。中にはプロ顔負けの個人技を披露する子もいたりする。また、グラウンドが至る所があり、そこには必ず2本のゴール代わりとなる棒が立てられていて、大人、子供関係なくみんなでサッカーをする。さらに、普段着として様々なクラブチームのユニフォームを着ていたり、町の市場のラジオから流れてくるのはサッカーの試合だったり、サッカーが生活の一部となっているようだった。



勿論、ワールドカップもタンザニアが出場しないからって盛り上がらない訳なく、試合がある度に大騒ぎだった。観戦方法も、何処の誰かがテレビを外に持ち出し、みんなで集まって見ていた。さながらパブリックビューイングである。どこの国が好きかと聞くと、一番多いのがブラジル。理由は一番強いから。ブラジルが得点をあげる度に雄たけびを上げて勝利の喜びを表現する。そして、あのドイツに7点も取られて惨敗した日は、タンザニア人の心の何かが発火したのか、町では大声で騒ぐ者、車のクラクションをひたすら鳴らして走る者など、深夜にも拘わらずすごい盛り上

がりぶりだった。

ある日、私の赴任先のセカンダリースクールで、4学年対抗のサッカー大会が開催された。私も日本代表ユニフォームを着て、チャンスがあれば出場しよう！とヤル気になっていた。しかし、試合はスライディングとタックルの応酬でみんな真剣。自分が入る余地が全くなかった。試合は2年生の勝利。勝ったチームは歌を歌い、踊って優勝を喜んでた。そんな、サッカー大好きなタンザニア人だけど、サッカーランキングは100位以下。タンザニアがワールドカップに出場するのは果たしていつになるやら？（2014/09/09）

■中田光星（越谷市）
24年度4次隊 タンザニア JV 理数科教師

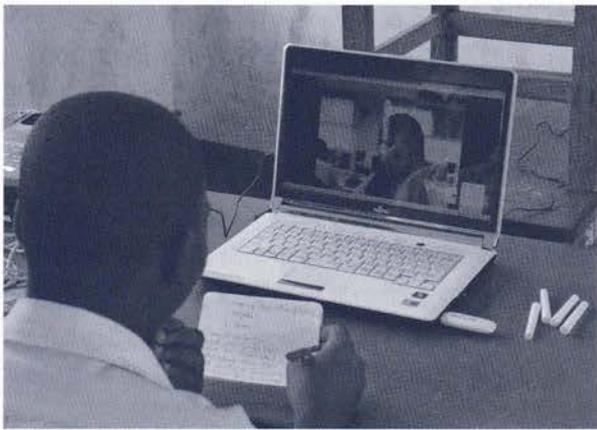
埼玉のみなさん、こんにちは

アフリカの東タンザニアのムトワラという港町で活動しています。

日本でアフリカと聞くと、最近ではエボラ出血熱が浮かんでくると思います。日本の知り合いから、エボラ出血熱のことについて聞かれる事も何度かありました。それだけ日本で報道されているようですね。ですが、今回のエボラ感染拡大は西アフリカが主であるため、タンザニアのある東アフリカでは9月末現在、感染の危険はありません。タンザニア人の間でもそこまでの話題にはなっていないようです。エボラよりも、最近は今年度末から始まる選挙が話題になっています。来年3月に帰国しますが、それまで平和に選挙が進んでほしいものです。

来年3月に帰国するという事は、活動も1年半が過ぎ、終盤になってきました。コミュニティ開発といった職種とは違い、理数科教師はマンパワーとして派遣されており、活動初期からやることは授業がメインです。タンザニアは慢性的な理数科教師不足なのですが、6月に韓国のボランティアであるKOICAが1名配属先に来たこともあり、私の配属先は現在教師の人数は足りている状態です。そのため、以前持っていた数学は無くなり、授業は化学だけと、授業としての活動はかなり少なくなりました。授業数が減った今では、「自分の授業をより良いものにするというより形に残るものを作っていこう」と考え、演習プリントや子供たち向けにタンザニア・日本の紹介動画を作成しています。

また、3月と8月には、タンザニアの生徒と日本の生徒の間でスカイプ交流を行いました。ネット環境はいいとは言えませんが、お互いの国の子



スカイプ交流

供たちは楽しんで交流をしてくれました。これをきっかけに、生徒が日本への興味と、英語の必要性を持ってもらえればなと思っています。今後も何度かスカイプ交流を行う予定で準備を進めているところです。

1年半もたつと、日本の様々なことが恋しくなってきました。タンザニアは南半球の赤道に近い国のため、季節の変化はほとんどありません。タンザニアにいと、日本の四季折々の風景や食べ物がとても懐かしいです。このような、日本の良さを再確認できる事も協力隊のいい点だと思います。とはいえ、活動はもう残り半年。まぢかに迫った帰国を胸に、後悔の無いようにやっていきたいと思っています。(2014/09/30)

■水谷元彦 (所沢市)

25年度1次隊 ウガンダ JV 理数科教師

ウガンダでの数学指導の中で感じたこと

埼玉の皆さん、こんにちは。ウガンダに来て1年以上が過ぎ、理数科教師隊員としての活動もいよいよ正念場という段階に入りました。今回は、活動を通じて感じたことをご紹介します。

ウガンダの学校において困難なことは沢山ありますが、まず、生徒数が極めて多いことと、教室や教材が十分に足りていないことが挙げられます。1クラスの人数は60名から120名です。それだけの数の生徒が小さな教室の中にひしめきあって授業を受けています。また、教室などの設備が不十分な場合も多く、私の配属先では、天井が壊れている教室をつい最近まで使っていました。「青空教室」と呼べば聞こえはいいですが、雨季は大変なことになります。

教材が足りていないことにより、数学の学習において必要とされる問題演習が十分に出来ないという実態があります。事実、私が教えているセカンドリースクール1年生(日本の中学2年相当)

でも、掛け算九九があやふやな生徒がいます。積み重ねの学問である数学においては、こうした基礎力不足が後に大きな影響を与えてしまいます。また、これは数学に限ったことではないのですが、英語の理解が不十分なために学習内容が理解できないという問題も起こります。ウガンダにはいくつかの現地語があり、私のいるマサカではガンダ語という言葉が使われていますが、授業は英語で行われています。日本では日本語で数学を教えていると言うと、ウガンダの先生たちは驚きます。数学はもともとヨーロッパの学問であったにもかかわらず、なぜ日本では日本語で数学を学べるのか、それは主に明治時代に先人達が学問の内容を理解し、それらに適切な訳語を当てていったからだ、といったことにも気がつかされました。

ウガンダで数学を指導していると、言葉の問題だけではなく、日本の教育の数多くの利点に気づかされました。私はそのいくつかを、ウガンダの学校に示していければと思っています。その一つが「百マス計算」です。基本的な計算力が不足しているウガンダの生徒たちに、掛け算の演習をさせていくために取り組みました。文化の違いなどもあり、日本のようにはいかない面もありますが、生徒が成長していく姿を見るのは嬉しいものです。



授業をしている私の姿

日本人だからこそ知っている、日本の偉大なノウハウ、こうしたものを少しでもウガンダに伝えていければ、ウガンダの明日は変わっていくのではないかと、そう願っています。(2014-09-30)

■高橋利恵子 (川越市)

25年度4次隊 モロッコ 理科教育

モロッコ事情

埼玉国際青年を育てる会の皆様、お久しぶりです。出発前には盛大な送別会を開いて頂き、写真もお送り頂き、遠いモロッコで感謝しています。埼玉県で頂いた、DVD、コバトンTシャツ

も大活躍しています。

送別会でお話した、モロッコインゲンは、すぐに発見しました。平たいインゲンと書いてありました。その後、日本の友人から、モロッコの塩レモンが日本でブームになりかかっているという情報を逆輸入し、購入、試食。塩漬けなのに、塩辛くなく、酸っぱくなく、確かに、日本で紹介されてる通り、「魔法の調味料」です。塩レモンクッキーも焼きましたが、これも、グッド。

さて、モロッコ生活も6か月となった私ですが、マラケシュの45℃の暑さも、ラマダンの断食も乗り越え、すこぶる元気です。活動は、教員養成所の生物の実験実習指導で、現地の実験材料探し、実験書作り、授業と、とても楽しく取り組んでいます。屋台で売られている、サボテンの実（美味しく、大人気）の種もベランダで育てています。きっと、何かの役に立ちます。さらに、準活動として、アパート近くの公立公園に通い、植物図録作りもしています。暑い夏も公園の木陰は涼しく、植物画や、読書と、自宅の庭のように楽しめました。

涼しくなった今は仕事帰りに訪れ、コーヒー売りから1杯3DH（40円）のカルダモンコーヒー、マカロン売りから1個1DHのマカロンを買い、カフェ気分も味わっています。モロッコ人にも、もちろん人気の公園で、鉄棒に筋肉自慢男子が集まって競い合ったり、ギター持参でのど自慢したり、ベンチでカップル自慢したり、皆、様々に楽しんでいます。兎に角、活動の場として、最適な、マラケシュで、大いに、頑張る所存です。



公園のマカロン売りおじさんに、写真を撮らせると頼んだら、「鳥でも撮りな」と断られ、マカロンだけ撮りました。（2014/09/27）



■唐川史子（三郷市）

24年度3次隊 モロッコ JV 水泳

羊を捌く手際に惚れ惚れ

任期も残り3ヶ月ほどとなり、若干寂しさが出てきているこの頃です。

恐らく今年のちょうど今の時期、羊犠牲祭と呼ばれるイスラムでの最大のお祭り前の人々の様子を投稿いたしましたので、今回はその内部についてお伝えします。



イスラム暦で日付けが変動する、イスラム教最大の行事ライドカビーラ（羊犠牲祭）、2014年度は10月5日、6日に行われます。1年前にも記したとおり、このお祭りに向けて毎年、モロッコ人は大きなお金を準備しています。残念ながら、この時期に金銭目当ての犯行が多いのもまた事実。各家庭で、神にささげる羊を1頭購入します（お金に余裕がある家庭ではラクダを捌くケースも）。

また、このライドでは、親戚がいくつも集まってお祝いするケースも多く、私が邪魔した同僚の家では、なんと3頭も羊を捌いておりました。

この羊を捌く使命を与えられるのは、やはり一家の主です。

羊を捌く工程を簡単にまとめると

- ①のど元を切る、血を抜く
- ②頭を落とす
- ③足元から空気を入れる（毛皮と肉を剥がれやすくするため、体全体が風船のようにパンパンに膨れるまで、空気を入れる）
- ④吊るして、毛皮を剥ぐ（着ぐるみを剥がす様な感覚に感じました）
- ⑤お腹を開き、内臓を取り出す。

この犠牲祭、最初見ることが出来ないくらい恐ろしいものだと考えていましたが、羊を捌く主のそれは手際のいいこと、思わず、惚れ惚れしてしまう手捌きで、私は目を離すことが出来ませんでした。日本で、同じことを出来る男性がどれほど

いるでしょうか…。

また、この日はいつものモロッコ人には見られないようなチームプレーが見れたのも事実。

男性が生きている羊を肉にする。女性が肉から料理へと変化させる。本当に素晴らしい分業を見ることができました。

また、この羊1頭は余すところなく食べられ、利用されます（脳みそは、非常に貴重かつ美味!!毛皮は絨毯へ…）。1つの命が犠牲になることで受けられる恩恵に心の底から感謝を覚える出来事でした。

あまりにも、真剣に見すぎていたので、「来年お前は捌くつもりなのか?」と聞かれたほど、私にとっては1つ1つが興味深いものでした。ちなみに、私も腸の水洗いを女性と一緒に手伝わせて頂きました。もちろん、腸も食べます。

(2014/09/29)

■伊藤悠太

24年度4次隊 ガーナ JV
PCインストラクター

カルチャーフェスティバル

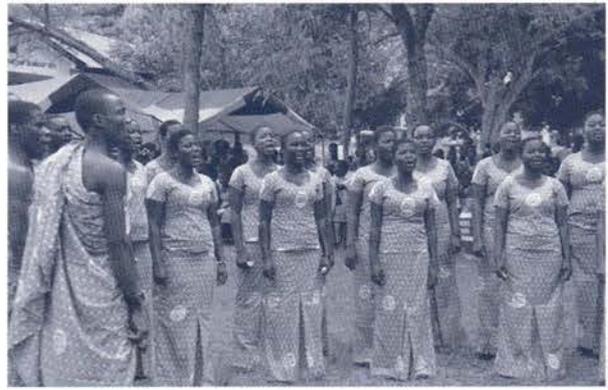
私は現在、平成24年度4次隊の青年海外協力隊としてガーナへ派遣されておりまして。

私の任地であるベキはガーナの首都アクラから車で4時間程の場所にある、周囲を山に囲まれたのどかな町です。ここでの私の活動内容は、ベキ技術高校でのICT(Information Communication Technology)の授業を担当しております。ここ数年ガーナではICTの教育に力を入れることを目標としておりますが、特に地方などではICTを教えられる先生の数不足しております。普段の授業ではPCを使用しながらオフィスソフトの扱い方やインターネットの仕組み、有効な使い方などを教えています。

今回は今年7月に行われた私の学校のイベント「カルチャーフェスティバル」についてご紹介したいと思います。

カルチャーフェスティバルとは学校対抗のコンクールのようなもので、2年に1度、近隣の高校約10校が一つの高校に集まり、2日間に渡りダンス・劇・詩・合唱・クイズなどのテーマ毎に各高校の代表が発表し、得点を競い合います。

ダンスや劇をする際には生徒が民族衣装に着替えたり、全身にペイントをして登場します。また、劇のテーマは村の部族同士の争いごとをテーマにしたりと、カルチャーフェスティバルを通してガーナの文化に触れることもできました。



合唱中

私の高校でも本番の1週間前から準備がはじまり、前日にはリハーサルも行い先生方が細かい指示を出していきます。

ガーナ人は普段から度胸があり、おおらかで明るい性格の人が多いため、大勢の前でも緊張することなく、高校生とは思えない演技力で劇をしている姿を見て感心しました。

そして、今回私の高校は10校中3位という高成績を残せました。生徒の頑張る姿を間近で見えたので、良い結果が出て嬉しかったです。次回は優勝を目指して頑張ってもらいたいと思います。

今回、このカルチャーフェスティバルを通して、発表している人や発表を見ている人、生徒、先生を含め全員が真剣に取り組んでいる姿を見て、彼らは自分たちの文化を大切に、なおかつ楽しむことで若い世代にも文化が浸透していくんだなと感じました。

私の残りの任期は半年ですが、今後もガーナの素晴らしいところの一つでも多く発見し、帰国後は日本の方に紹介していきたいと思っております。(2014/09/30)

■山崎咲歩 (川崎市)

26年度1次隊 ケニア JV コミュニティー開発
ケニアの愛国心

ケニアに来て3ヶ月、配属先に赴任してから2ヶ月が経とうとしています。私はケニア西部のカカメガという町に派遣され、OVOPというプロジェクトに関わっています。OVOPとはOne Village One Product(一村一品)の略称で、既に地域にある資源に付加価値を付けることで産業振興や生産者の所得向上を促すビジネスプロジェクトです。元々このプロジェクトは日本の大分県で始まった産業振興事業ですが、現在ではアジアやアフリカなど全世界でそのノウハウが広められています。ケニアでも国際協力機構(JICA)の

技術協力プログラムの一環として小規模ビジネス振興を目的に行われています。代表的なものに蜂蜜があり、蜂蜜からろうそくや保湿クリームなどを生産し、販売しているグループが至る所で活動しています。赴任したばかりの現在は、色々な製品に出会うべく、カカメガ中にいる生産者さんの元を訪れ、お話を伺う毎日です。



さて、首都ナイロビや任地カカメガを歩いていると、至る所で「KENYA」と大きく書かれたTシャツや帽子、国旗が描かれたブレスレット等を身につけている人を見かけます。地元の人向けのマーケットにもそういった商品が並び、実際に買っている現地の方を目にするのも珍しくありません。感覚として、そういうものは観光客がお土産として買っているイメージがあったので同僚に聞いてみると、「Proud of Kenyan (ケニア人である誇り)」という答えが返ってきました。ケニアでもインターネットが普及し、様々な情報や文化が錯綜している状況は日本とさほど変わらないように感じますが、それでもなお伝統的な衣装を身にまとう女性や近代化しすぎない日常生活を見ていると、時代に流されないケニア人ならではの愛国心が垣間見られる気がします。

「好き」という気持ちは人を夢中にさせると思っています。ケニアが好き、カカメガが好き、そういう気持ちを持っている人たちがこの町にはたくさんいて、そういう気持ちがこの町を活気づけ発展させていくのだと期待して、今後の活動も現地の方々と一緒に前進していけたら良いなと思います。(2014/10/01)

■平坂めぐみ (幸手市)

26年度1次隊 エチオピア JV 幼児教育

エチオピアのお正月

皆さん、こんにちは！ エチオピアに来て約3か月が経ちました。いまエチオピアでは6月半ば～10月上旬が雨季で、毎日突然スコールのよ

うな雨が降る時もあれば、一日中降っている日もあり、この時期の移動には折りたたみ傘は欠かせません。

首都アディスアベバに来て感じた事は、アフリカなのに寒い！…というのも、首都は標高が高く、2500m(富士山の5合目)の場所に位置しているからです。アフリカにしては、日中は涼しく快適です。

さて、今回初めてとなる1号報告で伝えたい事は、たくさんあるのですが、エチオピアのこの時期と言えば、新年のお祭りです！ え？新年って1月じゃないの？って思われますが、実はエチオピア暦というのがあり、9月11日が日本でいう新年になります。ちなみに、今は2014年ですが、こちらでは新年を迎え2007年になりました(理由は不明です…)。

「あけましておめでとうございます」がアムハラ語で「マルカム アディス アムット！」と言います。約2週間、ご馳走を食べたり、踊ったりと祝います。



私は9月26日にマスカル祭の前夜祭を観に行きました！ マスカル祭は起源1600年以上前にまで遡り、コンスタンチン国王の母であるヘレナ王女に苦しめられたキリストが、十字架を発見したことを祝したお祭りです。前夜祭ではマスカル・フラワーと呼ばれる黄色の可愛い花が家の門に飾られ、夜の間、火が点されます。人が集まる大きな場所では、マスカル・フラワーの苗木植えから始まります。人々はマスカルの花を載せた長い棒を持ち寄り、ピラミッドのように積み上げて燃やします。マスカル(十字架)の刺繍が入った民族衣装を纏った男女が多く参列します。

私は(どんなのだろう?)と期待しながら、マスカル・スタジアムという場所に歩いていくと…段々人混みが多くなり…まだまだ先に行こうとしたけど…全然前に進めませんでした！あまりの人の多さに唖然でした！それもそうと、この日を楽しみにエチオピア人は仕事を早めに切り上げ

るくらいです！ 職場の人も早く帰りたくてそわそわしてました(笑)。

そして、みんな細い管に入った布に火をつけ、手に持ちます。その様子は幻想的でとても綺麗でした！ 中心では、大きな十字架のマスカルフラワーが燃やされると、みんなすごい大盛り上がりです。2日間に渡って行われるマスカル祭は、とても大切な祭りなのです。地方でも、独自に新年をお祝いしているようです。マスカル祭は日本と違う新年の形だけれど、伝統行事を大切にするとところや、それに向けての意欲はどことなく日本に通じるところがあるように感じました！

(2014/10/07)

■小谷野 翔太 (川越市)

25年度2次隊 ニカラグア JV

感染症・エイズ対策

デング熱で大忙し

ひっきりなしに職場にかかってくる電話。それに対応する私のカウンターパートのカセレス医師「そっちの市の今日のデング熱の患者は何人？ 何？ レプトスピロシス症の患者もいるのか？」慌ただしく情報を確認する。

ここは中南米ニカラグア共和国、ヌエバセゴビア県の全州を管轄するオコタル市の保健局。各市の医師達から寄せられる感染症の状況を確認して対策を立て、人々の命を守る保健局。

私は2013年11月より青年海外協力隊としてニカラグア共和国で感染症対策のために赴任しました。

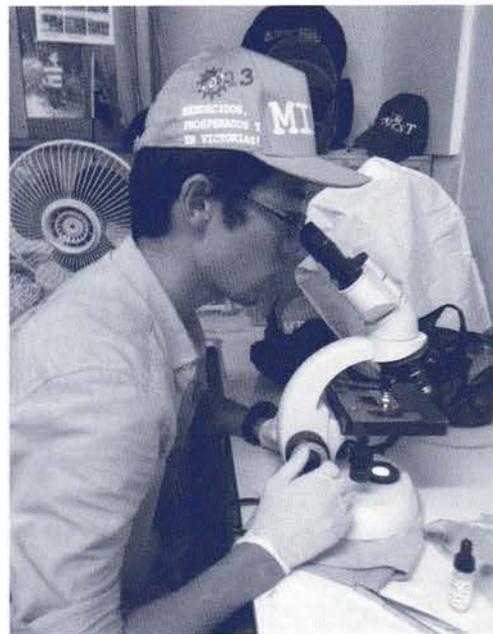
現場に配属されるやいなや、ニカラグア共和国全土でデング熱の感染流行(エビデミア)が起きていて、職場である保健局も蜂の巣を突いたような騒ぎになっていました。

ある日、保健局のリーダーが「SHOUTA! Let's go to where dengue fever!」と言ってきたので僕：「OK!」

ニカラグア共和国の公用語はスペイン語ですが、私がまだスペイン語力が乏しく、たまに英語会話が繰り返されます。

保健局と隣接するオコタル総合病院から先生をつれて、トヨタのランドクルーザーで道なき道を西へ約80kmほど走らせたところにあるムーラ地区の保健センターまで行きました。

そこにはたくさんのデング熱の患者さん達の姿が、しかも看護師さんの一人がデング熱にかかってしまい同僚のスタッフが看病をしていました。



リーダーはそれぞれの地区の保健事務所を回り、ご自身で患者さんを診て、現地の医師一人一人に丁寧にアドバイスをしていました。

日本で救命救急の現場を経験し、「感染症や公衆衛生の現場に携わることができたらもっと多くの人の命を守ることができるのではないか」と思い国際協力、感染症分野のドアを叩いた。今、自分の追っていた現場がここで繰り返されている。そう思うと幸せでしかたありませんでした。

また、ある日はデング熱を媒介する蚊の殺虫散布チームに同行させていただきました。現場に到着すると殺虫散布班、疫学士、医師、看護師で、どこの民家に患者がいるか、殺虫散布をどう進めていくかを素早く判断して進めていく(やはり、熱帯地方ということだけあって、熱帯感染症に対してのノウハウがすごい!)

そこではローカルのテレビ局が取材に来ていたので、ハロルド医師が、淡々と取材に応じて、「さすがだなあ!」と後ろで見ていたら、なんとテレビ局の人が、僕にも取材開始!?

TV:「お名前は」

僕:「日本からボランティアで来た日本人です」

そこで、

①デング熱とはどういうものか

②デング熱にかからないためにはとにかく蚊に刺されないこと!

③自分は、特にシャーガス病対策に力を入れていきたいと、文法ばらばらのたどたどしいスペイン語で説明しました。

そして、後日、お昼にレストランに行ったら、案の定、そこにいたおばさんが「あんた! 昨日TVで見たよ! シャーガスの人かい?!」と声をかけてくれました。(2014/9/10)

■奥村 洋（飯能市）

平成 26 年度一次隊 ニカラグア SV
障害児・者支援

優しいニカラグア人

平成 26 年 7 月 3 日に日本を立ち、早くも 2 か月が過ぎました。最初のひと月は、サンマルコスという小さな町で、ホームステイをしながら語学訓練を行いました。私はこの家族に温かく迎え入れられて、ニカラグアでの生活をスタートしました。その後、8 月 6 日に派遣先に赴任しました。私の派遣先は、首都マナグアから南へ 15 km 程の所にある Tesoros de Dios（神の宝）という障害児（NGO）のための学校です。乳幼児から高校生位までのあらゆる種類の障害児が、スクールバスで通ってきます。学校は、午前、午後 2 部制で、特殊教育や理学療法、作業療法、乗馬療を行っています。私は特殊教育部門への配属で 4 人のニカラグア人の先生たちと仕事をしています。言葉は不自由でも子供たちとのコミュニケーションは、どこの国でも共通です。子供たちは私の名前をすぐに覚えてくれて、なかよくなりました。



私がニカラグアにきて一番感じることは、穏やかな国民性の国ということです。先日、ボクシングの世界タイトル戦で、日本の八重樫選手とニカラグアのショコラッテ選手が対戦したことは、こちらでも話題になりました。ショコラッテ選手がチャンピオンになりましたが、勝利者インタビューの中で、対戦相手の八重樫選手に「彼の子供さんや家族に、神のご加護のもと幸せを祈ります」と言っていました。

私はニカラグアに来て、たくさんの現地の人と親しくなりましたが、必ず「日本にいる家族は元気ですか？」と聞いてくれます。ニカラグアの人たちは、家族をととても大切に、相手のことを気遣う優しい人たちです。この国に来て 2 か月、言葉は不自由、右も左もわからず、困難の連続です。でも何とか今日まで驚くほどスムーズに、派

遣先での活動を始めることができました。これは JICA ニカラグア事務所のボランティア調整員、現地スタッフをはじめ皆さんのおかげです。そして私が困った時、助けを求めると、いつもそこには笑顔で助けてくれるニカラグアの人達がいてくれます。私はニカラグアの人たちの明るく、優しく、穏やかな国民性に触れることにより、この国で頑張れる力を与えられました。

ニカラグアの人たちは、よく会話のなかで Gracia（ありがとう）という言葉を使います。私は Gracia という言葉の響きの中に、単に感謝の意味以上に人の温かさを感じて、私にとって大好きな言葉になっています。（2014/9/10）

■野村 徹（川口市）

24 年 3 次隊 コロンビア SV デジタル編集
FIFA ワールドカップサッカー

私はそれまでこれほど大きな歓声を聞いた事がありません。

ワールドカップのベスト 4 を争ったブラジル戦でコロンビアが 1 点を入れた時です。

それはまるで地響きのようで地面が揺れたような錯覚を抱きました。

私が最初に大きな歓声を聞いたのは初戦のギリシャ戦で最初のゴールを決めた瞬間でした。

私はテレビで観戦していましたが、あまり音が大きいので思わずベランダに出て外を見ると、近くのピヤホールにある大型テレビで試合を見ている人たちの歓声であることがわかりました。

それから私はブラジル戦まで前半はテレビを見て後半戦が始まると外に出てその熱狂ぶりをカメラに収めました。



コロンビアの快進撃は続き、コートジボアールを 2 対 1 で破ると次は日本戦です。

既に 2 勝してリーグ進出が決まっていたので日本戦は余裕で戦っていたように感じました。結果は 4 対 1 の快勝で街の中はラッパとクラクションの音が鳴り止まず、これで晴れてベスト 16 が決

まったという喜びにあふれていました。

「次のウルグアイは過去2回優勝している強敵だから勝つのは難しい」という大方の予想を裏切って2対0で勝つと、「やった！やった！」というように聞こえるバイクや自動車のクラクションが夜遅くまで鳴っていました。

この喧騒が嘘のようになったのがベスト4を争うブラジル戦でした。

コロンビアはこれまで先行逃げ切りのパターンで勝ち進んで来ましたが、ブラジル戦は先行され後半にも1点入れられてしまいました。歓声やラッパやクラクションの音がするのはコロンビアが攻め込んでいる時とゴールした時なので、その音がしないのは逆に攻め込まれている証拠です。

大画面が設置された近くの公園に行くと、広場一杯に人々が集まり応援していましたが、なかなかゴールが決まらないのでイライラしているようでした。残り時間から考えて同点にすることは難しい、「せめて1点入れて完封負けの屈辱は逃れたい」と祈るような思いが伝わって来ました。

そんな思いを察したようなゴールが決まると地響きのような歓声が湧き上がりました。

彼等はゴールが決まると小麦粉？の様な白い粉を誰彼となく投げかけます。

それが顔や頭にかかり白粉を塗ったようになります。

試合は2対1で負けましたが「良く戦った、コロンビア万歳」という感じで、騒いだり暴れたりする人もなく無事ブラジル戦が終わりました。

(2014/09/30)

■関 美奈子 (新座市)

25年度1次隊 グアテマラ JV 栄養士

グアテマラ紹介

日本の皆さま、埼玉県の皆さま、いかがお過ごしでしょうか？ 何が普通かと聞かれれば返答に迷いますが、日本社会で普通の暮らしをするのも容易ではない時代です。明日の保証は誰にもどこにもないわけですから、今日という日を一生懸命生きなければと思います。

北緯15度にありながら、グアテマラ西部、標高2760mにある任地は太陽の出ない地域で有名？で、寒さが最も苦手な私にとっては全身毛布に身を包み、手が悴む中この原稿を書いています。ここでの生活には赴任後すぐに慣れ、1年以上経った今では村人、担当小学校7校のお母さんたちとも良い人間関係ができ、生活や協力隊活動を楽しむ余裕があります。さて、今回は2つの



とうもろ
こしアー
ケード



支援物資

事柄を紹介したいと思います。

まずは、食。グアテマラの主食はトウモロコシで作ったトルティーヤかタマリト。いずれも焼きたて、蒸したてが何ともおいしい。日本人が新米の塩おにぎりが最高と思うのと同様、グアテマラ人にはアツアツトルティーヤに辛〜いトマトソースがあれば他に何もいらぬ。おかずは煮豆が週の半分程を占めます。肉は週に1〜2回しか食べられないので、ここでは重要なタンパク源。玉ねぎと塩を加えて煮ただけなのにシンプルで豊かな豆の味が口に広がる。これに塩の効いたカッテージチーズを合わせれば、黄金コンビ!? 野菜は安くて質もいいのに、残念ながらレパートリーがなく、野菜料理は週に1〜2回のみ。そんな中、私は野菜をたっぷり使った簡単で経済的な栄養あるメニューを日々教えている。最近のヒットは、「人参胡麻きんぴら」。料理には決して砂糖を入れないグアテマラ人は最初驚くが、食べてみると砂糖と胡麻のコクがとても気に入るようだ。

続いて、支援・援助の在り方。中米の中でも貧困率や栄養失調児率がダントツに高いといわれるグアテマラ。村の生活は質素ではあるが、それらうかがえない。しかし、各省庁のトップレベルではもらえるものはできるだけもらいたいと数字の操作が行われているのだろう。また、先進国はいかに途上国援助にお金をかけたかが話題となる。そんな需要と供給サイクルに、人々ははめられていく。例えば、私の活動する地域では、アメリカの支援が大々的に入ることが決まり、最近大量の物資が届いた。全生徒の学用品、大量の油、豆、米、トウモロコシ、豆乳粉。それと鉄、葉酸、亜鉛などのサプリ。食育をするのが大変困難であることがお分かりいただけるだろうか？

(2014/09/07)

■澤田和哉（羽生市）

26年度1次隊 パラグアイ JV 体操競技

日本の裏側、パラグアイより

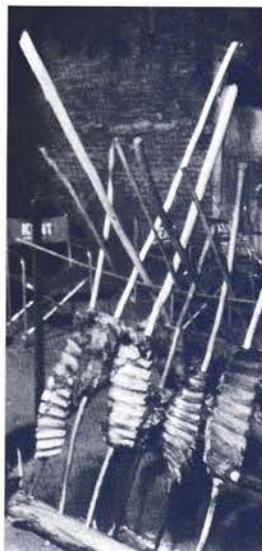
私がパラグアイに派遣されてからそろそろ3か月です。やっと生活に慣れてきました。活動自体はまだ始まったばかりで、技術の指導しかしていませんが、先生方も生徒達も協力的で楽しく活動しています。今後は先生方と話し合いながら、少しでも良い練習環境に整えていこうと考えています。

パラグアイは南半球のため、現在は春にあたります。しかしパラグアイでは冬でも気温が30℃を超える日があり、その時からすでに半袖半ズボンで生活をしてきたため、季節の変化を実感できていません。また、パラグアイの夏は40℃を超えるそうで、私の活動している体育館は冷房設備無しであるため室内で50℃近くなるそうです。今からヒヤヒヤしています。

こちらに来てからとても特徴的だなと感じたことを2つ紹介しようと思います。1つは誕生日パーティーについてです。日本では祝福する側が様々な準備をして、誕生日の人をお祝いするのが普通ですが、パラグアイでは祝福される誕生日の人が様々な準備をし、家族・友人を招待して喜び合います。私が参加した誕生日パーティーは参加者が40～50人位で、そこに歌手も呼び、みんなで歌ったり、踊ったりをしました。特に誕生日の歌を歌ったときの大合唱は素晴らしかったです。

もう1つはアイスクリーム屋さんが異常に存在します。実際に任国内研修時にホームステイをさせていただいた家はアイス屋さんでした。そしていま生活している家の周辺には私の知る限り5か所もあります。やはり冬でも30℃を超えるパラグアイでは一年中アイスが売れるため、アイス屋さんが増えるのではないのでしょうか。パラグアイに来た時は、アイス屋さん巡りをしてみてください。

食生活については肉とイモ、そしてパンがメインです。代表的な肉料理としてアサード（焼肉）というものがあります。このアサードという肉料



肉料理(アサード)

理はパラグアイの人々がほぼ毎週末に食べる伝統料理で、普段はアサード専用の調理器具を使用し調理します。しかしパーティー等で人数が多いときは、地面に穴を掘りそこで火を焚き、その上に木の棒に肉を刺したものを立てて、焼きます。その光景はまさに豪快という言葉がぴったりの光景でした。見た目だけでなく、味もとても美味しかったです。

今後も現地の人との生活を大切にしながら、少しでも現地の力になれるように努力していこうと思います。
(2014/09/28)

■小口聡美（さいたま市）

26年1次隊 ネパール JV コミュニティ開発

任地で感じたこと

私は2か月半前、ネパールに青年海外協力隊としてやってきた。でも実は、これが初めてのネパールではない。10年前、学生だった頃に1度スタディツアーとして2週間程度ネパールに滞在している。その後も夏休みを利用して6週間ネパールにインターンとして来る予定があったのだが、当時マオイストによる紛争中で危険なためにネパール渡航を断念した。そこから考えて10年後、こうしてネパールに来られたのも何か運命的なものかと思ってしまう。



10年間でネパールは変わった。でも、変わらなかった部分もある。10年前の自分の日記を見ると、カトマンズの町の印象として、「閑散としている」と書いてある。でも、今回の私の街の第一印象は「人が多くてごみごみしている」だった。今のカトマンズは本当に人が多く、人を避けつつ、牛や犬を避けつつ、また牛や犬の落とし物を避けつつ歩くのは本当に難しい。今は慣れたが、道を横断するのも難しい。消えかけた横断歩道はあるが信号はないので、一緒に渡る人を見つけてついていく。夜間は本当に怖い。街灯も少なく、車もスピードが出ているので、車から見えて

ないのではと、夜間の道路横断時は懐中電灯を携帯するようにした。

変わらない部分も、もちろんある。特にそれは人に対して感じている。10年前、村に行っても街でホームステイをしても、皆が優しく受け入れ、歓迎してくれた。2か月半暮らした今も、ネパールの人は温かい人たちだという印象は変わっていない。特に私の任地のキルティプール市は歴史的に農家を営んでいた家庭が多く、家庭に招かれると農家をしている祖父の家に行った時のような、そんな気持ちになる。とにかく歓迎したくて、食べ物やお茶が次から次へと出てくるのだ。時にはお節介とも思えるようなこともあるが、歓迎されているのだと思うと、それも心地よい。

これから深く関わっていくにつれ、嫌なこと、面倒くさいことも増えるだろうが、その分大切な人や思い出が増えていくのだろうという気もしている。まだまだ活動は始まったばかりだが、思い切り楽しんでいきたい。(2014/09/19)

■高井優美(さいたま市)

25年度1次隊 サモア JV 小学校教育

Malo,soifua!!(こんにちは)

サモアに来て1年が過ぎました。残された任期も1年を切りゴールが見えてきたと同時に、身の引き締まる思いです。

さて、今回は私の住んでいる村で最近開催されていた「Faamalosi tino(健康な体をつくろう)」プログラムについて紹介します。

様々な課題がある中で、健康問題はサモアでも深刻な問題の一つ。特に最近「肥満」に対する対策が話題になっています。私の活動先の小学校でも「野菜を食べよう!」「油の多い食事はやめよう!」といった貼り紙をするようになったり、テレビのコマーシャルでも「体を動かそう!」という内容のものを放送したりしています。また、首都のアピアでは運動促進の目的で定期的に「ズンバ」が開催されていて、積極的にこの問題改善に取り組んでいます。そして、私の住んでいる村でも6月ごろから村全体で一つのプログラムが始まりました。それが「Faamalosi tino」プログラムです。

始まりは朝5時から1時間程度のズンバ。ダンスが好きなサモアの人にとってズンバはもはやダンス。早朝から楽しそうに踊っている声が聞こえます。そして、子どもたちが学校から帰ってくる14時くらいからスポーツの時間になります。子どもはネットボール(バスケットボールに似て



学生チームの女の子

いて、パスだけでボールをつなぐ競技です)、女性バレーボール、男性ラグビーとそれぞれ色分けしたグループで対戦します。サモアの人たちはみんなバレーが上手。私も混じってやらせてもらいますが、なかなか役に立てないことが多いです。そして17時すぎに整理体操も兼ねたダンス(ストレッチ)をして終了です。

6月~8月にかけて週2日で行われていたこのプログラム。現在は終わってしまいましたが、また近いうちに再開されるのを村の人たちは楽しみにしているようです。(2014/9/22)

■柳澤 妙(東松山市)

25年度4次隊 フィリピン JV 服飾

雨季

未だ終わらないフィリピンの雨季は6月から始まった。5月に着任し、しばらくの間快適に過ごしていた私に、一番初めに訪れた巨大な壁がこの雨季の気候だ。

日本の雨季に比べ、土砂降りの時間が長く、約5ヶ月間も続く雨季は、未だかつて体験したことのない雨量。排水の設備が充分整っていないので、雨の後、大きな道路はプールのような、舗装されていない道を歩くには、ズボンをまくり足は泥だらけになってしまわなければならないほど、地面がぬかるんでしまう。日照時間が少ないのと湿度が高いのとで、洗濯物が3日干しても乾かない。

ここミイロイロ州ミアガオ町では、半数の人は竹の家に住んでいる。竹の家は竹を2cmほどの幅で縦に、それを横板となる竹に釘で打ちつけて作られている。自然と隙間が出来、通気性に優れている。それでも土地によっては、竹がカビてしまう。半数の人は鉄筋で作った家に住むようになってきている。私の家は鉄筋で、そのうえ海に近いので、通気性がそれほど良くない。家の中は

湿っぽく、玄関のドアや3つある窓を開け放しても、持ち物がなんでもしっとりしてしまう。そしてそれらは、次第にカビてしまうかさびてしまうのだ。



除湿器やエアコンは勿論ないので、扇風機を四六時中まわしている。消毒も欠かさない。それでも、次々にお気に入りの物や中学の頃から使っていたものが駄目になるのを、ただなすすべもなく見届けるだけだ。おかげで大分持ち物が少なくなった。人間は必要最低限の物だけで生きるに足るということを知った。

木炭ならミアガオでも買えるので、先日から部屋の四隅に置いてみたが、まだ効果は感じられない。竹炭を作ることができれば、効果は木炭以上だと聞いたので、試してみようと思う。

それでも、少しずつ雨が降らない日が増えつつある。あと1ヶ月の辛抱と自分に言い聞かせつつ、日本の四季折々の気候に思いを馳せ、日本に生まれたことのありがたさを感じずにはいられない。

また、そのような困難な気候をもちもせず、楽しく生きていくフィリピン人の姿は本当にたくましい。フィリピン人がタフだと言われるのは本当なのだ。どんな困難にも屈しない彼らの精神力はこの気候から生まれたのだろうと私は想像する。私が日本に帰る頃には、ほんの少しでもそんなふうになれたらと思う。(2014/09/23)

■真壁祐太(草加市)

平成25年度4次隊 フィリピン JV 理科教育
素晴らしい団結力

私は、青年海外協力隊としてフィリピン国アルバイ州レガスピ市にある Albay Public Safety and Emergency Management Office(APSEMO)「アルバイ州公共安全対策事務所」に派遣されている。要請内容は、「州の初等中等学校の生徒(児童)、先生に対し、防災意識

向上のための災害メカニズムについて配属先と共に講義を実施していく」である。

アルバイ州は、台風や噴火等の災害がよく起こる地域だ。現在、私においては、9月20日頃から、レガスピ市にあるマヨン火山の活動の活発化に伴いレガスピ市で活動できない日々が続いている。このような地域で私は、少しでも災害で被害を受ける住民が少なくなればと思い、日々学校廻りをしながら先生、生徒(児童)に対して啓発活動を行っている。



今回は、去る7月に到来した台風「グレンダ」と災害対策に力を注いでいる一つのバランガイキャプテンについて話をします。

まず台風「グレンダ」は、7月15日にレガスピ市を直撃した。進路はレガスピ市ではなく、アルバイ州北部、もしくはルソン島北部を通過する予定だったが、進路が急に変わり、レガスピ市に上陸する前に勢力が強まり、予想以上の被害があった。しかしアルバイ州は災害時に州知事やAPSEMOを主体とし、ZERO CASUALTY(死者ゼロ!!)を目指しており、グレンダ到来時は他州では死者が出たが、アルバイ州は死者が一人も出なかった。それはAPSEMOの力だけでなく、各市町村が一丸となって死者ゼロを日頃から心がけているからだと思う。

その中で印象に残ったのがバランガイキャプテン(※バランガイ:フィリピンの都市<cities>と町<municipalities>を構成する最小地方自治単位。村、地区・区を表す独自のフィリピン語)の話だ。そのバランガイはフィリピンの中で最も災害対策に力を入れており、賞を受賞したこともある。しかしバランガイキャプテンは、「私は何の力もない。住民がいつも私を助けてくれている」と言う。その理由としてキャプテンが話をしたのは、ある時そのバランガイで火事が起きた。フィリピンの家屋の多くはライトマテリアルで作られている上、密集しており、火事が起きるとすぐに全体に広がる。それを知っているキャプテンは一報を受けた際、急いで現場に駆けつけた。し

かし、既に火は消えていたようだ。それは住民が一丸となって消化活動を行い、被害が広がる前に鎮火できたからだそうだ。そんな住民たちに話を聞くと、「キャプテンを尊敬していて、キャプテンの力になりたい」と思っているようだ。

私はそんな暖かい気持ちの持った人たちがたくさんいるレガスピ市で活動できることを誇りに思っている。(2014/09/29)

■野口祐子(所沢市)

25年度3次隊 タイ JV 作業療法士

タイで流行っていること ~タイのサッカー~

タイのスポーツというと、「ムエタイ」をイメージする人も多いと思いますが、サッカー・バレーボール・バドミントン等のスポーツも人気があります。その中でも、サッカーは非常に人気があります。タイには日本のJリーグのようなサッカーリーグが存在しています。



真ん中が日本人選手 他はJOCV

現在、このサッカーリーグに約40人の日本人選手が活躍しています。パタヤが観光地として有名なチョンブリー県では、監督・コーチ・トレーナーも日本人です。そして、私の任地であるラーチャブリー県にも、タイプレミアムリーグである「ラーチャブリーFC」というチームがあります。このチームに今年度より、日本人選手が活躍しています。

スタジアムによって多少値段は異なりますが、私の任地では1回300円程度(全て自由席)で観戦することが出来ます。私も時間がある時は、ユニフォームを着て観戦に行き、タイ人と一緒に任地のチームを応援しています。

急速に発展しているタイリーグですが、サッカー場の設備やセキュリティーなど整っていない部分も多いです。日本ではサッカー観戦には全く行ったことのない私ですが、今ではサッカー観戦は任地での楽しみの一つとなっています。

(2014/09/29)

【情報提供】JICAの危機管理について

最近、アフリカのエボラ出血熱が大きなニュースになっています。

JICAでは、エボラ出血熱の対象国に滞在中の関係者に対して、注意喚起と予防対策、新規の派遣の制限などを行っていますが、当初、エボラで死者が出ていた国は、ギニア、シエラレオネ、リベリア、ナイジェリアの4ヶ国で、いずれも、協力隊を含むボランティアは派遣されていない国でした。

最近、協力隊派遣国のセネガルでも感染が確認されましたが、感染国からの入国者ということで、その後大きな動きはありません。今後、もしも日本政府やJICAから退避勧告が出されるようなことがあった場合には、即日、現地事務所を通じて、隊員を含む全関係者に連絡され、事務所手配のフライトで出国することになりますが、今のところ一般社団法人協力隊を育てる会が実施している「協力隊活動視察の旅」も予定どおり実施される方向です。

なお、隊員派遣国での発症はないのですが、発症近隣国(ベナン、ガーナ、ブルキナ、セネガル、カメルーン、ガボン等)に派遣されている隊員の内、保健・医療関連隊員については、念のため直接、患者と接する活動については中断するなどの、個別の対策の指示が出ているそうです。

JICAボランティアの危機管理体制については、基本的には「健康」と「安全」は本人の意識と行動により、「自分自身で自己管理して守ること」が重要ですが、ボランティアたちが心身ともに健康な状態で活動できるよう、JICA事務所からもさまざまな側面でサポートが行われています。

健康管理面では、派遣前訓練時に健康管理についての説明や相談が行われ、定期健康診断や相談などによって、ボランティアの健康状態を把握しています。

派遣国によっては、看護師免許をもつ在外健康監理員を配置し、現地で信頼のおける現地顧問医と契約を結ぶなど、派遣中に発症した傷病の治療や、助言・指導、現地で流行している感染症に関する情報提供を行います。

また、現地では対応できない傷病が発生した場合、医療体制が整った近隣の国や都市等に緊急移送も行います。

万一の病気や怪我、障害、死亡等に備えて、災害補償制度や労災保険特別加入、国際協力共済会などの制度もあります。

安全対策面で大切なのは情報の共有です。開発途上国では一般犯罪、テロ、誘拐、クーデターなどが日本に比べて高い確率で発生していますし、道路の舗装状況や運転マナー、車の整備不良など交通事情が日本と大きく異なり、交通事故にも十分注意する必要があります。このような国々で犯罪や交通事故に巻き込まれないように生活するには、各自がしっかり情報を把握し、危機管理意識を持つことが重要になります。

そのために、派遣前訓練や派遣国での着任時オリエンテーションで、受入国特有の状況や対策（犯罪防止策、交通安全対策、公共交通機関利用時の注意等）について、詳しい説明が行われています。

また現地では、JICA 関係者による安全対策連絡協議会が年 2 回開催されています。この研修にはボランティアや随伴家族も含めて参加し、JICA からの情報だけでなく、互いに体験を共有し合い、同じ国に暮らしているからこそわかる安全対策についての日々の工夫、たとえば犯罪被害に合わないような買い物の際の現金の出し入れ、持ち歩くバッグの種類、現地に適した服装やアクセサリーの付け方など、滞在経験の長い人から具体的なノウハウが伝達されます。

また交通安全についても、講習会などを通して安全管理意識の高揚が図られています。

実際の防災防犯対策についても、きめ細かな支援が行われていて、防犯のための扉や窓の補強や、警備員の配置など、住居防犯の徹底が図られています。

また緊急時の連絡のために、電話等の通常の通信手段の他に、無線機の設置、衛星携帯電話の配備、携帯電話の貸与（通話料自己負担）を行うなど、有事を想定した連絡手段を二段構えで確保するなど、通信の確保も安全対策の重要な柱として位置づけています。

これらの一般的な安全対策の他に、貧困や政治が原因となる犯罪やクーデターなどにより、治安状況が一時的に悪化してしまう場合には、渡航制限を行ったり、活動している国の中であっても立入禁止区域を指定したり、入国を制限する場合があります。また治安の悪化により安全確保が困難になると判断される場合には、安全な場所への一時避難や国外退避（周辺国や日本）、最終的には任地や受入国を変更する場合があります。

これらの安全対策を充実させたくて、万が一の事態に対応するために、JICA 本部では海外からの緊急連絡を本部において確実に受付けて対応できるよう、365 日 24 時間体制の緊急連絡体制

がとられています。

また現地においても、その国の治安や安全対策を熟知し、日本人独特の行動形態も知っている人材を安全対策クラークとして活用し、日々の治安情報の収集と発信、住居防犯から交通事故対策まで広範囲の仕事を 24 時間体制で対応しています。（2014/09/30）

新入会員のご紹介（38 号発行以降入会の方）

山崎 理恵子（川越市）
澤田 弘男（羽生市）
涌井 則行（深谷市）
米山 真澄（東松山市）

《お知らせ》

JICA ボランティア帰国報告会の開催

日時：平成 27 年 1 月 31 日（土）15:00 より（予定）

場所：大宮ソニックシティ

例年、JICA ボランティア家族連絡会開催時に行われる帰国報告会が、今年度は、どなたでも参加できることとなりました。帰国隊員が複数の部屋で帰国報告を行い、出入り自由で沢山の体験談を聞くことができる形式になる見込みです。皆様には後日詳細を通知いたしますので、是非、御参加ください。

■編集後記

今のマスコミ報道によれば、海外、特に途上国に出向くと、いつ危険に遭遇するか心配な状況のように思えてきます。西アフリカ発のエボラ出血熱、中東をはじめ続発する地域紛争。派遣先が当事国ではなくても、日本からは見えにくい現地の事情に、ご家族や関係者の不安は募るばかりでしょう。そこで今号では JICA から、アフリカ諸国での現状と予防策、万一の紛争発生時の緊急対策などを寄稿してもらいました。

また、派遣中の隊員たちからの報告を多く掲載しました。現地での苦労と喜び、その臨場感あふれる文章に、逆に励まされた思いです。（山田洋）

- ・発行：埼玉国際青年を育てる会
- ・編集：広報委員会
- ・事務局：さいたま市浦和区高砂 4-11-17
（井上事務所内）
TEL 048-862-1234 FAX 048-862-1235
E-mail: inotai0430+skssk@gmail.com
- ・http://www.sodaterukai-saitama-jica.com